

直通特急が過ぎた頃、ホームに上がってきたのは橘ゆかりだった。

部活の写真部を終え、帰路につく為早歩きで到達したが、一步遅かった。

「あ、このあと結構待たないと……」少し沈んだ表情で妙なダルさを覚えた。

一つは列車の来るのが少し待たないといけないのと、今日の部活での出来事がどうしても頭から離れなかった。

部長の沢中裕也はデジタルカメラのコンテストで、著名な雑誌の賞を幾度か取ったことがある才能の持ち主だ。

勉強もスポーツもそれなりに熟す、ちょっと魅力的な男子で後輩の女子部員からも羨望されている。

ゆかりも同様で、裕也に好意を寄せている一人だ。

只、先程までいた部室であった遣り取りで、若干嫌気がさしていた。

後輩の一年女子の一人が、裕也に抱きつき頬にキスをするという横暴に出たのだ。

これを目撃した部員一同が騒ぎ立てたが、その一年生は裕也をダーリンと呼んで周囲を更に挑発したのだった。

男子部員からはからかわれ、女子部員からは抗議の声が上がった。

この一年生、武隈ヨリミというが、普段から派手好きで、教師からもマークされている人物。

先輩はというと、何処か白けた感じで、はいはいといった構えで受け流している。それだけで、ゆかりはホツとしたが、ヨリミの行動がどうしても許せなかった。

男女の行動が時に最悪の事態を招くというのは、高校生という精神年齢だと粗方判る筈だが、頭に血が上った時点では、やはり冷静な判断は大人でも難しい。

写真部の構成は、部長を初め副部長、その他男女5人で成っている。

昔の写真部のように暗室を使わないので、女子でも気軽に入部する事が出来る。

ゆかりが始めて裕也の指導を受けたのが、入部間もない時だった。

一眼レフを持っていたが、その殆どの操作が判らず困っていた。

すると躊躇いもなく、裕也が手解きをしてくれ、一週間続けて部活の際にレクチャーをしてくれたことがあった。

裕也が逆にゆかりに好意を寄せているのではと感潜ったが、裕也には他の部員と同様の対応を取ったままでだった。

「これでどうかな？EV操作の仕方、判った？」そう聞かれて赤面しながら、浮いた口調で「はい！」と答えていた。

其れから裕也を異性として意識し始めたのだった。

高校生にもなると男子も身嗜みを整える心も持つだろうし、特に女子はおしゃれに目覚めるものだろう。共学であれば、尚更だ。

そんな事を思い巡らしている内に、直通特急が間もなくホームに入ってくる。

家に着くと十九時を少し回った処だった。どちらかというとお爺ちゃん子であつたゆかりにとっては、祖父のカメラ好きの功が要して写真部への扉を開いた事もあつたので、その想いは特に強かった。其処に恋愛感情が入ると、留まりを知らない。

「裕也先輩……」。気持ちの整理がつかず、お風呂の中で妄想していた。

そこへヨリミの顔が浮かんできた。慌てて頭を振った。

明日は休みだ。部活の時にはつきりとヨリミに言っておけば良かったと少し考えたが、感情のぶつかり合いで喧嘩に発展しかねない。「それはヤダな」と心の芯がチクリとした。

ヨリミにはそれとなく、注意してあげよう。余計なお世話かも知れないが、裕也が迷惑しているのは一目だからだ。

お風呂から出て、体重を量り牛乳を飲む。決して太っている訳ではないが、年頃の女子としては、どうしても気になる分野なのだろう。

ゆかりは自室に戻り、ドライヤーで髪を乾かしていた。

不意にスマートフォンが鳴った。

相手は…、裕也だった。何故、部長が？えっひょっとしてフラグが立った？

ドキドキしながら電話に出ようとすると、緊張の余り中々応対出来ない。

やっこの思いで一呼吸し受話器に耳を当てる。

「も、もしもし？」声がうわずって、変に思われたかなと考えてしまう。

しかし、受話器の向こうの相手はそんな細かい事を気にする相手ではなかった。

「あ、夜分にゴメンね。橘、突然だけど明日の十時から八幡神社で撮影会しようと思うんだけど、来れるかな？」

え？突如撮影会？考えた振りをして、既に答えは出ている。

「も、勿論参加します！」

「良かった。急遽決まったからどうかかなと思ったんだけど、橘が来てくれたら助かるよ」助かる？どういう意味だろ？

兎に角、これで裕也と日曜日、一緒に撮影会が出来る。それだけで嬉しい。

急遽決まったのは顧問の及川先生の都合かな？でもそんな事はどうでも良かった。今夜は興奮して眠れないかもしれない。明日、どんな服装でいこうか？

想像している内に深い眠りにつく。

海で泳いでいると、裕也が近付いてきて「足、届いている？」と気遣ってくれる。

「は、あいえ、届かないです」というと、裕也は大事そうにゆかりの身体を優しくお持ち上げてくれた。

「せ、先輩！私！」感情が爆発しそうになる。

その瞬間、ぱつと起き上がる。…夢だった。なんと恥ずかしい夢だ。

若干、自己嫌悪というか、欲求不満かと思う。

それでも他の部員も居るが、裕也が自分のスマートフォンに電話を掛けてくれたことが、たまらなく嬉しかった。

そうだ、時間だ。七時二十四分。約束の時間には充分間に合う。